

幕末明治の写真師列伝 第七十九回 宮下欽 その一

明治初年（明治8年（1875）頃と思われる）に、名古屋で営業写真館を開業した写真師に宮下欽という人がいる。この人は信州松代藩の出身で、幕末期は宮下欽次郎という名であった。この宮下欽次郎について語る前に、少しだけ松代藩の幕末期における写真事歴について語ろうと思う。

嘉永7年1月16日（1854年2月13日）、米国使節ペリーは琉球を經由して再び浦賀に来航した。これは前年アメリカ合衆国大統領の親書を幕府に献じて、同国との通商交渉を迫った返事を促すためである。幕府は横浜に応接所を設け、幕吏を遣わしてその交渉をさせることにし、これらの警護を松代藩と小倉藩に命じた。この時、松代藩は江戸家老望月主水を総督に、佐久間象山を軍議役に任じた。

まず、色部貢編『象山先生五十年祭記念号』（松代青年会仮事務所、大正3年）所収、故近藤民之助「米使渡来の状況」に以下のように書かれている。「（前略）又ペリリを除くの外は毎日或は隔日に上陸して横浜を徘徊す、一日我輩八人にて宿陣の庭にあり、然るに米人五六人にて、写真師を連れ来り通弁を以て我輩を写し度旨を述べ、且一列して写し取らせ呉れべき趣を依頼す、依て其言に従ひ写真を取らせたる処其喜悦の体にて言語をなすと雖も更に弁せず、通弁より申聞るには、大層悦で礼を述べるとのことなり、我国人写真の第一著手にして米国へ持帰り嘸以て彼是評すらんと何れも言えり、抑も横浜の応接所は船中にて最初談判のとき、彼より其場所を示すべき旨にて夜中標示を達置くとのことなり、既に応接も無事に相済み米艦も出発せしに付、我輩も三月十四日藩邸に帰る、蓋し今回米人の所業並に器械等を親く見聞し兼て象山先生素我輩に説く所の談説なることを信じ、茲に始て開港希望の念を生ぜり（原片假名文に改めたる外は凡て其儘の写しなり）」この記述は象山の門人、近藤民之助が嘉永7年2月10日（1854年3月8日）頃に横浜応接所において米国人の写真師に写真を撮られたという逸話である。

次に、嘉永7年2月15日（1854年3月13日）、象山が川田八之助ほか一名に送った書簡に、「（前略）既に一昨日か異人の内十二三年前始めて發明ひし写真鏡を持来り小弟の乗り参候馬を写し候故兼て其器の製作使用を記し候書を蔵し罷在其用ひ候二種の薬名をも心得居候に付其二種の名をよびいづれを用ひ候やを付き居り候同心へ尋ねさせ候所異人大に驚きいかがして其名を存じ候やと申程にて候ひき其様子を以ても此邦の人は何も心得ず候と申様存居候と被察候依て異国御見分の節小弟御供被仰付候はば少しく御補も可有御座と相考此事此間も心中には有之候ひしかども自ら銜するの嫌を免かむ候故に認めず候ひき彼と申是と申余りに遺憾なる事に奉存候に付小嫌を顧みず吐露仕候宜しく御勘弁御進止被下候様奉万祈候以上」との記述がある。

続いて、『横浜軍中日記』の嘉永7年2月17日（1854年3月15日）に以下の記述がある。「十七日 朝早応接の場を巡警す午後又巡警を異人ダゲロウライペンを出し某が乗り来りし馬を写す傍に浦賀同心何かしありこれをしてイオヂウムを用ふるかを問はしめんとするに某に直に問ふへしと云ふよりて其器を指しイオヂウムかフロビウムかといひしに異人驚きたるさましてフロビウムと答へ且其器を撫てなからダゲロウライペンといふ即又鎖てダゲロウライペンといひしかばますます某がよく其名を識りたりしを喜ひしおももちにて手を挙げ某を招き親しく其器を覽せしむ大かたは先年林鉄之助より

得たりし此器の製作をしるしたる書に載せし所に同じ但其匣やや平らめにして鏡を挿心所は横に突出したる黄銅の筒也其端に牝螺（註：ルビ「ひんら」）ありて鏡をは写さんと欲するもの遠近に従て替へ用ふる也やがて某が影をも移したりき（註：「写したりき」の意味）与力香山何かしに属して献貢物をも窃に見る事得たり」これは一人の外国人がダゲレオタイプの写真機を象山に向けて撮影した際の逸話で、象山は浦賀同心を通じて、写真の種板を造る際にはヨウドを使用すべきか、臭素がよいかと訊ね、その米国人は、日本人がそのようなことを知っていることには大変驚いてその質問に答えていることを記している。この時、象山の方はこの米国人が写真のピントを合わせるのに螺旋を用いているのを見て感心している。

さらに、石野瑛編著『亜墨理駕船渡来日記』（武相考古會、昭和4年）の嘉永7年2月18日（1854年3月16日）の記述には、「一 十八日 今日異人写真鏡と申を持来人の姿或ハ山水草木等を写し取申候此写真鏡と申すは蘭制（製）の器物ニ而甚タ希（稀）代の仕掛也一尺三四寸四方の箱前後ニ覗キ目鏡有之箱の中半分方（註：ルビ「より」）上ニ合セ鏡を仕掛け写シと思人を三間斗向ニ立セ置ク其人の姿前の覗目鏡方箱の中入ル後の上半分位の所ニ少シ傾向け仕掛なる鏡ニ写ル其の姿前の方半分方上ニ傾向仕掛け有之鏡ニ移り其姿返りて後の眼鏡へ移（写）申候姿大小は人と臺の遠近ニ寄而大小有之候扱程能移（写）り候時上の方玉板ヲ指入申候玉板ニ白キ葉ヌリアリ姿此玉板ニ写リ留ル扱上げ印ヲ致し置船ニ歸リ油火ニ而アプリ油中ニ而葉をフキ取る姿ハ玉板ニ残ル其人ノ面色衣類の色迄不残分明ニ見え申候其時玉板の裏え又白キ葉をヌル益々明ニ分ル」とあり、この時の様子がこれで判る。

嘉永7年（1854）のペリー再来航の際に、吉田寅次郎（松陰）と金子重輔の密航計画が露見して、象山もその使族者として伝馬町の獄に投じられ、同年9月18日（1854年11月8日）、吉田ら共々、在所表において塾居の判決が下された。そのため象山は同年9月29日（1854年11月19日）、家族一同と共に護送されて、江戸から松代に帰ることとなった。この前のまだ江戸に象山が居た時の話として、岡村雄海編『象山先生五十年祭記念号』（信濃教育會、大正2年）所収、加藤忠友談「写真機械の製作」に、「象山先生は原書によつて写真機械を製作せられたといふことは誰れも知つて居ることであるが其方法其苦心はどれ位であつたかといふと象山先生が江戸から信州へ帰へらるる前に何とかして写真器を作つて見たいと苦心せられ当時輸入した蘭書の中に写真術といふ本があつた、象山先生は此の書を得て其幻術の面白いことを感じて試して見ようと先づ今のカードの大きさ位の銀の板の裏へ銅が付いて居る物へ水銀の蒸発気をかけてそれを斜に掛けて下でアルコールランプで水銀を温めれば銀の蒸気が銀板に付いたのを暗い處に入れて向ふの物体を写すのである、併し眼鏡につきては大に苦心した芝の中門前に鏡を造るものがあつてなかなか上手だといふので先生は眼其處へゆきレンズのすり方を教へて漸く出来上つた、さて其仕掛で写して見たが人の顔などは変挺子にうつつて容易に物にならぬ其後追々苦心して植木鉢などは旨く写るやうになつた何にしる世間に誰れも知らぬ写真術を研究されたことは先生が如何にも工芸的頭腦に富んで居たかが知られる。（信毎抜萃）」

これらの記述から象山はすでにダゲレオタイプの写真術について、その知識があつたことが判る。

（森重和雄）